

## 『ダンマパダ』と教育(二)

古田 榮作

### 要旨

「ダンマパダ」(＝「法句経」)を通して、仏教の根本思想を考察した。仏教の根本思想となった「四法印」(諸行無常、諸法無我、涅槃寂靜、一切皆苦)が「ダンマパダ」の中でどのように説かれたかを考察する。「ダンマパダ」は詩偈であり、端的な表現になっている。どのような状況の下で説かれたかは明らかにされていない。そこで各詩偈に附随する因縁譚に学び、現在の信者指導にどのように活かされているかも考察した。信者への教導のために、近代になってから日本で試みられた「仏教刷新運動」に関連のある常盤大定の「佛陀之聖訓」が「教学」をいかに考えたかも考察した。

キーワード…諸行無常 諸法無我 涅槃寂靜 一切皆苦 公案 因縁譚

『ダンマバダ』は釈尊の金口よりほとばしる無間自説の「法句」、すなわち仏教の妙諦を宣示せる勝句を分類収集したものと称される<sup>(1)</sup>。孔子がその弟子や当時の人々に応答したもの、あるいは弟子の間に行なわれた問答などを記した『論語』<sup>(2)</sup>、イエス・キリストの生涯とその言葉を記述した初代キリスト教の文書である『福音書』<sup>(3)</sup>と比して無間自説の勝句（＝偈頌）のみで構成されているところにその特質が認められる。また最古層の仏説を伝承し、長短さまざまな詩集で、ときには散文を交える『スッタニパータ』(suttanipāta sūta)は「経」、nipātaは集成の意で（経の集成）を意味する<sup>(4)</sup>とも文体上の特徴をもっている。

さらに中世文学との関連で、末法思想を背景に無常の出離隱遁して西方浄土を希求する自己のあり方を問いつめた<sup>(5)</sup>、鴨長明の「方丈記」の冒頭の「ユク河ナカレハタエスシテシカモ、トノ水ニアラス」は「法句経 無常品」の「如河駛流 往而不返 人命如是 逝者不還」と相通するものがあるとす説もある<sup>(7)</sup>。残念乍、この「無常品」はパーリ語の原文には見られない品である。また、多くの勅撰集でも、多くの釋佛の歌が詠まれているが、『法句経』を題材としたものはほとんどない<sup>(8)</sup>。

☆

まず 佛教の根本教義にかかわる偈頌をとりあげてみよう。

『一切諸行は無常なり』と「観の修習による」智慧によつて観る時、次に苦を厭悪する。これが清浄に「到る」道である<sup>(9)</sup> (277)

“All conditioned phenomena are impermanent”; when one sees this with Insight-wisdom, one becomes weary of dukkha. This is the Path to Purity.

と北島は英訳しているが<sup>(10)</sup>、この偈頌について解説している“Buddhist Legends”は直截に

“Impermanent are all existing things.”

With wisdom who perceives this fact.

Straightway becomes contemptuous of suffering.

this is the Way of Salvation.

と訳している<sup>(11)</sup>。この解説では、阿羅漢果を得られないで師（＝仏陀）から瞑想の課題を受け取り、森の中で全力で格闘し、彼らの必要によ

りふさわしい瞑想の課題を得んとして返答する五百人の僧に対して、師は「この僧たちへの最適の瞑想課題はなんだろうか？」と自問した上で、「カッサパ・ブッダ (Kassapa Buddha) の時代にこれらの僧は無常の性質についての瞑想に二万年を費やした。無常の性質は私が明らかにしようとするひとつの命題であろう。」と思索した上で、彼らに「僧たちよ、感覚的存在および他の形態の存在においてはすべて存在するものは非現実性の故に無常であると明示して、この偈頌を示したとされる<sup>(12)</sup>。

漢訳ではこの偈頌は

一切行無常 如慧所觀察 若能覺此苦 行道淨其跡<sup>(13)</sup>

とされている。これは仏教的世界観である「諸行無常」を直截に表明する偈頌であるが、それは日本でも『平家物語』の冒頭の章句にある「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰のことはりをあらはず<sup>(14)</sup>。」に示されるように、琵琶の音にのせられて吟唱されて深く日本人の世界観に浸透しているものでもある。漢訳の偈頌に示されたものは、一切の行が無常であるとの智慧の観察に従って観察するならば、この世の苦は能く覚知すれば、道を行することで其の跡を浄めらる、というものである、苦の超克への方策を示すものであり、流動変化が宇宙万有の実相であるとする仏教の基本的立場を示すものである。

「ダンマパダ」は続いて、

「『一切諸行は苦なり』と『観の修習による』智慧によって観る時、次に苦を厭悪する。これが清浄に『到る』道である。」<sup>(278)</sup><sup>(15)</sup>と説く。

“Buddhist Legends”は、「この際に、これらの僧が苦の性質について瞑想に没頭しているのを知っている、阿羅漢果を得た僧（＝師）が「僧たちよ、存在のすべての要素は、我々の上に重くのしかかり、それ故に苦が生じるのである」<sup>(16)</sup>と彼らに向かって話した。そう言うって、この頌偈を明示した。

“Involved in suffering are all existing things.”

With wisdom who perceived this fact,

Straightway becomes contemptuous of suffering.

『ダンマパダ』と教育<sup>(1)</sup>

This is the Way of Salvation.<sup>(16)</sup>

漢訳では

一切衆行苦 如慧之所見 若能覺此苦 行道淨其跡<sup>(17)</sup>

この偈頌は、英訳・漢訳にも示されるように「一切皆苦」との認識の上で、苦の超克の方策を示すものである。

「苦」(S<sup>16</sup>dukkha D<sup>16</sup>dukkha) は「①せまり悩まず、という意味。②苦しみ。悩み。思いどおりにならぬこと。身心を悩まされて不安な状態。この苦しみには四種類(四苦)、または八種類(八苦)があるという。③有漏法の異名。現象的存在。現象的生活。人間の現実の状態。④過患(過咎と災難、煩惱・業などを生ずることなどの意)に同じ。……」の意とされる。<sup>(15)</sup> 生存しているものの三つの苦しみとして、  
苦苦(好ましくない対象から感ずる苦しみ。疾病・飢餓などの苦から生ずる身心の苦悩をいう。苦痛を苦とする状態)、行苦(世の移り変わりをみて感じる苦しみ。世の無常転変であることから受ける苦。この場合には、行は遷流の意と解せられる。)と壊苦(好ましいものが壊れることにより感ずる苦しみ。自己の愛したものが破滅するときに感ずる苦悩。樂しむものが滅することから生ずる苦)がある。<sup>(18)</sup> 日常語化した「四苦八苦」は、「人生の苦悩の根本原因である生・老・病・死をいい、これに愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦・五陰盛苦の四苦を加えて八苦という。愛別離苦は、愛する者と別れる苦しみ。怨憎会苦は、この世では怨み憎む者とも会わなければならない苦しみ。求不得苦は、欲して求めてもなかなか物事を得ることのできない五陰盛苦は五盛陰苦ともいい、人間の身心を形成する五つの要素(五陰・五蘊、すなわち色・受・想・行・識)から生ずる苦しみが盛んにおこることをいう。<sup>(19)</sup>」  
これに続いて

「『一切諸行は苦なり』と「観の修習による」智慧によって観る時、次に苦を厭患する。これが清浄に「到る」道である。」<sup>(279)</sup>

“Buddhist Legends”は、この頌偈を

“Unreal are all existing things.”

With wisdom who perceive this fact,

Straightway becomes contemptuous of suffering.

This is the Way of Salvation. <sup>(12)</sup>

と、英訳している。漢訳では、

一切衆行空 如慧之所見 若能覺此苦 行道淨其迹 <sup>(22)</sup>

および

一切衆行我 如慧之所見 若能覺此苦 行道淨其迹 <sup>(23)</sup>

とされる。

この偈頌は「諸法無我」を示すものである。この「諸法無我」は、「すべてのものは、因縁によって生じたものであって実体性がないということ。三法印の一つ。」<sup>(24)</sup>とされ、「三法印」は、「仏教思想の特徴としての三種のしるし。諸行無常と諸法無我と涅槃寂滅とをいう。」<sup>(25)</sup>であり、「涅槃寂滅」はニルヴァーナの境地は安らぎであるということ<sup>(26)</sup>とされ、「ニルヴァーナ」(nirvāṇa)は、「原語は吹き消すこと、吹き消した状態を原意とする。涅槃と音写。入寂・入滅・円寂と漢訳する。原始仏教では、貪欲・瞋恚・愚癡の三毒の煩惱の火を吹き消し、煩惱を滅することと説明されている。また稠林のないこと、とも解されて、煩惱の稠林のないことともいわれる。それはまた智慧の完成の境地である。(佛教が興起した時代の諸宗教が理想の境地をニルヴァーナとよんでいたため、佛教はそれを採用したのである。)これに有余涅槃と無余涅槃の二種がある。有余涅槃とは、心の束縛から離れてはいるが、なお身体を有している状態。無余涅槃とは、身体の死によって、身心ともに束縛を脱した状態。(最初期の佛教では、このような区別を立てなかったが、ある時期以後、この二種を想定するようにになった。)安らぎ。永遠の平安、一切の迷いから脱した境地。絶対の静寂。心の安らぎ。(迷いから離れた)理想の境地。迷いの消えた状態。静けさ。すがすがしさ。さとり。究極のさとり。さとりの領域。さとりの世界。輪廻に対する。また死去の意。<sup>(27)</sup>とされる。

「一切衆行空」・「一切衆行我」・「諸法無我」は、流動的な佛教的世界観の空間的側面を、「諸行無常」は時間的側面を表明するものである。そこには世界が「因縁」により構成されているという認識がある。

「五蘊の」生滅を観ないで、たとえ百年生きるよりも、「五蘊の」生滅を観ながら一日生きる方が、よりすぐれている。<sup>(113)<sup>(28)</sup></sup>

この頰傷に関して以下のような因縁譚が残されている。

サヴァティ (Savathi) の町に裕福な商人がいた。この夫婦には息子と娘がいた。娘は深窓の令嬢として手厚く育てられ、夫婦は娘が年頃になると彼女にふさわしいと思われる青年との婚約をし、結婚の日取りも決めていた。結婚式が間近に迫ったある日、娘は下僕と駆け落ちしてしまった。若夫婦は、とある村に居を定め、農耕により、穏やかな生活をした。やがて妻は懐妊し、出産の時間が近づいてきた。夫の反対にもかかわらず、妻は「実家を出産する」決意をし、夫の留守を見計らって実家へと向かった。そのことを知った夫は、妻の後を追いついてきた。妻は夫の反対するのに耳を傾けず、夫の留守中に長男を連れて実家へと向かった。帰宅した夫は、妻の後を追いついた時に、妻は陣痛に見舞われていた。前回とは違って、天候は急速に変化した。暴風雨が彼らを襲ったのである。雨風を凌ぐために、夫はその材料となるものを探し回った。蟻塚の傍に手頃な灌木があった。それを取ろうとして、夫は毒蛇に襲われ、絶命してしまった。妻は苦痛に悶えながらも、次男を産み落とした。妻はどれほど待ったであろうか。どんなに待っても夫は姿を見せなかった。妻は長男に「お父さんは私たちを見捨てたのよ」と言った。夜が明け、あたりが明るくなって、妻は変わり果てた夫の姿を目の当たりにした。仕方なく、妻は次男を背負い、長男の手を引いて実家に向かって歩み始めた。道すがらに、大きな河があった。河は前日の降雨で増水していた。体力の衰えのために、妻は三人一緒では河を渡ることではできないと考えた。長男を岸に残して、次男を背に彼女は河を渡り始めた。進んでいくと、上流から頃合いな小枝が流れてきた。彼女は考えた。小枝に次男を乗せて三人で河を渡ろう、と。次男を小枝の上に乗せると、彼女は長男を呼ぼうとした。その時、鷹が舞い降りてきて次男を掴まえて天空高く舞い上がっていった。彼女は悲鳴を挙げた。長男はその悲鳴を母の自分を呼ぶ声を間違えた。速い流れに足を取られて長男は姿を消してしまった。ほんの一瞬の間に彼女は愛する二人の息子を失ってしまった。我にかえると、彼女は河を渡り終えていた。とほとほと歩いているうちに、サヴァティから来た男と出会った。彼女は男に両親のことを尋ねた。男は口ごもりながら、昨夜の嵐で、彼女の両親、兄の三人は、邸が崩壊して息絶えたと話した。彼女は狂乱し、衣服をかなぐりすて、真っ裸で、泣き喚き、さ迷い歩いた。「ふたりの息子は死んでしまった。愛する夫も死んでしまった。父も母も兄も逝ってしまった。」とぶつぶつ言いながら歩く姿を見て往來の者は怪訝に思い、ある者は「この氣違ひ女」と罵声を浴びせ、中には石や汚物を投げ

つける者さえいた。彼女はいつの間にか、佛陀のおられるジェタヴァナ (Jetavana) 僧院の傍まで来ていた。その時、師 (＝佛陀) は信者に説法をしておられた。神通力で彼女の存在を認めた佛陀は「すぐ僧院のなかに入るように」とテレパシーを送られた。これを受けた彼女は僧院に入り師に近づこうとした。信者は彼女を追い払おうとしたが、師は「この者を追い払ってはならぬ」と制して、彼女にやさしい言葉かけた。師の顔をじつと見つめていた彼女は、やがて正気を取り戻し自分が真裸でいることに気づき恥ずかしさのあまりその場にうずくまった。ある信者はその上着を彼女に与え、それを纏った彼女は師の足元に寄り、五体倒置をして「尊者よ、お願いです。お助け下さい。次男は鷹に攫われ、長男は流れに浚われ、夫は毒蛇に命を奪われ、嵐で (頼りすがろうとした) 父・母・兄まで亡くしてしまいました。これからどう生きていったらいいのでしょうか?」「パターチャーラよ、安心するがいい。何も怖れることはない。今、あなたの前には心のより所を示してくれる師がいる。」と声を掛けられ、「パターチャーラよ、あなたはごく短期間のうちに夫も息子も、また父も母も兄も失ってしまったことを嘆き悲しんでいる。しかし、そなたのように家族を亡くし嘆き悲しむ者の涙の量は、この限りなく続く輪廻の世界で四つの大海の水よりも多いであろうか。そなたもやがて寿命が過ぎてあの世に行く者なのだ。……心のより所をなくしたと怖れることはない。いくらそなたが親類縁者に多大の期待をかけて救いを求めようとしても、輪廻の苦しみから解放される手段とはならない。だから、賢者は自分の身・口・意を浄め、苦しみの原因である渴愛を捨断して、涅槃に導く道を求めようとするのである。」と説き明かされたのである。更に、

死神に襲われている人には、子供たちは頼りにならず、たとへ父親や親族といえども「頼りに」ならず、友人縁者の所も庇護「所」とはならず。(288)

この道理を知りて、戒「により」制御する賢者は、涅槃に導く道を速急に清める。(289)とも、説き明かした。

この話を聞いて、彼女は「諸行無常」「諸法無我」「涅槃寂滅」という佛教の根幹的見解について悟りへと導く道へ踏み出し、た。師へ入門を請い、師は尼僧の僧院に住むことを認め、彼女は比丘尼となった。彼女の悟りは次のようなエピソードでも伝えられている。

ある日、比丘尼パターチャーラー足を洗った水を三回に分けて地面にまいた。最初の水は、近くにまき、次のはそれより遠くにまき、三



度目はさらに遠くにまき、それぞれ地面に水が吸い込まれて消えていくのを見て、「人の寿命も、最初にまいた水のように、幼くして死ぬ者、次に壮年で死ぬ者、そして老年で死ぬ者がいる。」と人生の無常を悟った。その時、佛陀は彼女の悟りを感じし、神通力で彼女の前に現われると、「パターチャラーよ、そなたはこの世の五蘊の生滅について悟りを得た。そこで、佛陀は、偈頌で、

「五蘊の」生滅を觀ないで、たとえ百年生きるよりも、「五蘊の」生滅を觀ながら一日生きる方が、よりすぐれている。(113)

と説き明かされ、比丘尼は阿羅漢果を得たのである。後に佛陀はその真摯な修行を見て、「パターチャラーこそ比丘尼な中で戒律を厳守し修行に精進する点において第一である。」と称賛されたのである。<sup>29)</sup>

パラチャーラーに関する逸話がいささか長くなったが、この頌偈(113)は、日常生活の中に佛敎的世界觀の浸透をはかり、涅槃へと導く実践を促すものである。

この偈頌は、五蘊の生滅を觀察することで、無常・苦・我を智慧が生起し、悟りへの道が開かれることを示唆する。中村元によれば、五蘊は、五つの集まり、五種の群れ、の意。蘊(§Khandha §skandha)は積み集められたもの、または類別されたもの、の意。人間存在を構成する要素。人間存在そのもののあり方を、五つの面からみて、五蘊を立てる。われわれの存在を含めて、あらゆる存在を五つに分類したものをいう。環境を含めての衆生の身心を五種に分析したもの。色・受・想・行・識の五つである。(1)色(§rūpa)は物質一飯、あるいは身体。身体および物質。物質性。(2)受(§vedana)は感受作用のことで、感覚・単純感情をいう。(3)想(§sañña)は心ころに浮かぶ像で、表象作用のこと。(4)行(§saṃskāra)は意志、あるいは衝動的欲求に当たるべき作用のこと。潜在的形成力。受・想以外の心作用一般をいうとも解される。(5)識(§viñāna)は認識作用。識別作用。区別して知ること。また意識そのものをいう。心作用全般を総括する心の活動。大まかにいうと、物質性・感覚・表象・意志的形成力・認識作用の五つともいったらよいであろう。色は身体であり、受以下は心に関するものであり、合わせて身心をいう。われらの個人存在は、物質面(色)と精神面(他四つ)とからなり、この五つの集まり以外に独立の我はないと考える。等と<sup>30)</sup>されている。この偈頌は

若人壽百歲 不知成敗事 不如生一日 見微知所忌<sup>31)</sup>

と漢訳されている。ここでは「五蘊の生滅」が「成敗事」と訳されているのである。パラチャーラーの逸話は、教導の一つの姿を示して



いるものである。師が狂人となつてしまつた彼女を觀て、狂乱の原因を察知し、温かい言葉をかけて、彼女を正氣に戻らせ、彼女の狀態が、特殊なものではないと論じ、偈を示して、彼女に思索を促している。打ち水の地面への浸透を契機に「人生の無常」を悟らしめるのである。この逸話に示される瞑想の課題の提示と修行者の思索の集中と思考の尖鋭化と深化を促す坐禪に課される「公案」を師（＝佛陀）の瞑想への援助として位置づけているのである。「公案」は、「①公府の案牘の略。政府の確定した法律案であつて、民の遵守すべきもの。②転じて、禪宗で、万人のよるべき至理を表示するもの意に用い、具体的には祖師のことば・言句・問答などをさす。禪の課題。祖師が修業者を導いた手本を書き記したもの。仏道參學者の手引きとする。因縁話題ともいう。禪宗ではすぐれた禪者のことばや動作などを記して、これを坐禪しようとする者に示し、考える対象または手がかりとさせた。特に臨濟禪で參禪者に參究テーマとして授けた。……③転じて、特に日本の曹洞禪では、山川草木・飛花落葉などのもろもろの自然現象も、修行者に佛教の真理を教え示している公案であると考えられた。」とされるものであるが、この逸話にも、瞑想の課題としての偈頌の提起と修行者の思索の深化を試みようとしているのである。

☆

教学の姿として、一つの文書を参照してみよう。日露戦争が勃発した一九〇四年に発行された常盤大定の「佛陀之聖訓」は、その一章を教学にあて、教、聞、学、知の四節で構成している。聞、知の二節では「ダンマパダ」の章句が、聞、学、知の三節では「ダンマパダ」と関連の深い「出曜經」の章句が用いられている。

佛のたまわく、世の良醫の病を知り、藥を識るに四種あり。若し之を具足せば名醫と爲す。

- 一には、病相を識りて、之に應ずる藥を用ふ。
- 二には、病の起る源を知り、之に隨て藥を用ふ。
- 三には、已に生ぜる病を治して、之を去る。
- 四には、病根を斷除して、後に復生ぜざらしむ。

如來の出現せる、亦四種の法藥を宣説す。何等か四なる。四諦是なり。<sup>(33)</sup>

教の節の冒頭に掲げられた聖訓である。「応病与藥」を病相、病原、病状、病根の四つを知り、それへの対処を藥・治療に求めている。

これに対応する「法業」が「四諦」である。「四諦」と同義である「四聖諦」(四諦はすぐれた神聖なものであるから聖〔Śānya Pāriya〕という字をつける。諦〔Śatya Pāsacca〕とは真理・真実ということである。)は「人生問題とその解決法についての四つの真理」という意。すなわち、苦諦〔Dukha-satya〕・集諦〔saṃdaya-satya〕・滅諦〔nirodha-satya〕・道諦〔mārga-satya〕のつじつまである。(1)苦諦。この世は苦であるという事実。(2)集諦。苦の原因が煩惱・妄執であるという事実。(3)滅諦。苦の原因の滅という事実。すなわち無常の世を超え、執着を断つことが苦しみを滅したさとり境地であるということ。(4)道諦。さとりに導く実践という事実。すなわち理想の境地に至るためには、八正道の正しい修行方法によるべきであるということ。とされ、理想の境地へ道を明示し、その実践法をも示すのである。

常磐が聞の節で引用しているのは

多聞令志明	已明智慧増	智則博解義	見義行法 <sup>35</sup> 安
聞爲知法律	解疑亦見正	從聞捨非法	行到不死處 <sup>36</sup>
若多少有聞	自大以憍人	是如盲執燭	炤彼不自明 <sup>37</sup>

という三つの偈頌である。いずれも『ダンマパダ』ではなく、漢訳「法句経」(「多聞品」)にのみ記載されているものである。第一の偈頌は「多くの事を聞くことよって意志が明確になり、志が明らかになることよって義を解することができ、義を知れば法を行う事も容易になる。」とするものであり、多聞↓志↓義↓法の実践と説き進めている。第二のものは「聞くことで、法を知り、正を認識し、非法を捨てることで不死の境地に達することができる。」とするのであり、理想の境地へと到達するために、聞↓知法↓正の認識↓法の実践を示し、第三のものは「知ったかぶり」を戒めるものであり、多少の知識は自分にもましてや他人にも、行動の指針を与えるものとはならない。この三つの間に冠する偈頌は法の実践を導くものないしは行動への確固たる指針を示すものであり、実践への智として捉えられている。学に關しては、『出曜経』の以下の偈頌を挙げている。

雖誦千章	不義何益	寧解一句	聞可得道 <sup>38</sup> (出曜経 卷第二十二 廣義品)
雖復壽百歲	不知生滅事	不如一日中	曉了生滅事 <sup>39</sup> (出曜経 卷第二十二 廣義品)

愚誦千章 不解一句 智解一句 即解百義(出曜經 卷第十九 華品)

智者尋一句 演出百種義 愚者誦千句 不解一句義(出曜經 卷第二十二 親品)

いずれも「誦」と「義」とを対照させ、「誦」のみでは無意味であり、「義」を解することで「行動の指針」や「法」を正しく認識し、実践することへつながるとするのである。知については、『ダンマパダ』の

治水者は水を計画的に導く、矢作りは矢を曲げる。大工は木を曲げる、賢者は自己を制御する。(80)<sup>(42)</sup>

一つの堅い岩山が風に動かされない如く、賢者は非難や賞賛に動じない。(81)<sup>(43)</sup>

両傷頌とも自己制御ないし、自己の確立を強く説くものであり、自己を正しくとらえ、他者に左右されない自己の確立を掲げている。これらに関する因縁譚は次のようである。

パンディタは七歳の誕生日に、「長老サーリプッタ (Sāriputta 舍利弗) の下で僧になりたい。」と母親に頼んだ。母親は、子どもの意志を妨げるべきではないと考え、長老サーリプッタを家に招待し食事を提供した後、息子があなたの下で仏門に入りたいと申しておりますので、今晚彼を僧院に連れてまいりたいと伝え、その晩、息子の入門の許可を請うた。長老は、仏道修行の困難を論じた後に、彼の意志を確認した。息子の意志が堅固であると認めた長老は入門を許可して、戒律を教えた。入門後、八日目に長老は、パンディタのみを連れて村に托鉢に出かけた。というのは、長老が僧院中を掃除・整頓を点検し、僧院を修行の場所としてきちんと整えていたからである。村に出ると、パンディタは初めて見るものへ長老に尋ねた。水師が掘った溝を何であり、何の目的でそうしているのか？を尋ね、弓師の矢作りの作業を見て、矢を真っ直ぐに整えるのは何のためなのか、などを尋ね、車大工の所では、何をしているかを尋ね、車の部品の製作について尋ねた。こうした労働の姿を見て、パンディタは、「理性をもたないものをきちんと整え、人間に役立つようにうまくこなすことができるのに、理性をもつ自分自身の理性を統御し、人間としての完成のために誰もが精進しないのは何故だろうか？」と自問し、思索し始めた。同行し、パンディタの行動の一部始終を見ていた長老は、自分の部屋の鍵を与えて、部屋に居るように命じた。新入門者は長老の命ずる通り長老の部屋に入り、そこで坐し、思索していた。師(＝仏陀)は、その日の早朝に朝食を取り、新入門者パンディタが不還果を得たことを感知し、このまま瞑想を続けければ阿羅漢果を達成できると感知し、長老が部屋に新入門者のために食物を運ぶ前に、神通力で部屋に駆け

つけ、長老が新入門者の思索を妨害しないようにした。師が長老の部屋に到着しようとする時に、長老は信者から布施として与えられた食物を携えていた。師は、時間稼ぎのために、長老と問答した。問答が交わされている間に、新入門者は、更なる高位の悟りである阿羅漢果に到達していた。<sup>(44)</sup>

小柄な比丘ラクンタカ バティヤ (Lakuntaka Bhadiya) は、常日頃仲間の比丘たちに、耳や鼻をつねられ、からかわれていた。しかし、彼は決して怒るころがなかった。ある日、比丘たちが彼の忍耐強さを話題にしていた時、師 (＝仏陀) は、阿羅漢は決して怒ることはなく、口汚く罵ることはない。またおだてや調子のよい言葉にのることもない。」と語られて偈頌を示された。<sup>(45)</sup>

常磐の求める教学は、宗教上の教学である。教・聞・学・知の四節で考察するものであるが、『佛陀之聖訓』の巻頭には、「七佛通誠偈」(＝「ダンマパダ」183)、「ダンマパダ」5 「大般涅槃經」から引用された「雪上偈」の英訳が示されている。<sup>(46)</sup> これらの偈頌は、佛教の根本思想を表示するものである。この内、「七佛通誠偈」は前稿で考察したので、ここでは、佛教の平和主義思想を示す「ダンマパダ」の偈頌を考察する。

この世において実に怨みは怨みによって決して静まることはない。怨みを持たないことこそ静まるのである。これは昔から「変わらぬ」真理である。<sup>(5)</sup><sup>(47)</sup>

静穏ないしは平和を心起因するものと捉えるこの偈頌の思想は、第二次世界大戦後に確立された「ユネスコ」の憲章の前文の

*That since wars begin in the minds of men, it is in the minds of men that the defences of peace must be constructed;*<sup>(48)</sup>

と共通するものがある。

この偈頌の因縁譚は次のようなものである。

ある農家の息子は父親が死亡した後にも、一家の大黒柱として仕事に精をだし、残された母親の面倒をよくみて家庭を支えていた。母親は息子に結婚するよう勧めた。しかし、息子は、母親との安穏な生活に満足していたので、結婚しようとする素振りを示さなかった。母親は、息子の将来を心配して、村々を歩きまわり、やっとのことで、息子の結婚相手となる娘を見つけ出して、二人を結婚させた。ところが、この嫁は不妊症であることがわかった。息子に跡継ぎができないことを心配した母親は、健康な若い娘との再婚を息子に勧めたが、

「妻に満足している」として母親のいう再婚話には興味すら示さなかった。しかし妻には衝撃的な話であった。「夫はいつの日にか母親の勧めの再婚に同意するかもしれない。そうなれば私は新しい嫁の下で召使のようにこき使われるであろう。……その前に私の手で健康で若い娘を探し出して夫の新しい妻にしよう。」と考えた彼女は村々を歩き回り、若い健康な娘を見つけて家に連れ帰った。新しい嫁はすぐに妊娠し、夫も大層喜んだ。前妻の方は、日が経つにしたがって新妻に対する嫉妬心が増大するばかりであった。ある日、嫉妬に狂った前妻は新妻の食事にこっそり堕胎薬を入れ、新妻は流産してしまった。しばらくして、新妻は再度妊娠した。前妻は前回と同じように新妻の食事に堕胎薬を入れ、再度、流産させた。新妻はやがて三回目の妊娠をし、前妻は前の二回の妊娠と同様に、新妻の食事に堕胎薬を入れ、流産させた。今度は、胎児ばかりでなく、新妻の容態にもおよぶものであり、瀕死の重態の中で新妻は前妻の悪行を知り復讐を誓ってこの世を去った。前妻も彼女の悪行を知った夫に激しく殴打され、それが原因で彼女も死んでしまった。新妻は雌猫に生まれ変わり、前妻は雌鶏に生まれ変わったのである。新妻の雌猫は雌鶏が卵を生む度に取り上げて食べてしまった。雌鶏は自分が生んだ卵が雌猫に食べられる度に悲しみ雌猫への復讐を誓った。両者はやがて寿命が尽き、雌猫は雌約に、雌鶏は雌鹿生まれ変わり、今度は雌鹿が子鹿を生む度に雌約が子鹿を襲って食べるのであった。この仕打ちに雌鹿は雌約に復讐を誓い、死後、女夜叉として生まれ変わる。雌約はサーヴァチの町の地位ある家の娘として輪廻転生した。やがて娘は結婚し、妊娠した。子どもを主産すると女夜叉が襲って食べてしまった。二番目の子どももまた誕生後間もなく女夜叉に襲われて食べられたしまった。三番目の子どもが誕生した時、彼女はいち早く女夜叉を察知し、赤ん坊を抱きかかえて佛陀のおられる僧院に逃げ込み、「尊者、どうかこの子をお助け下さい。」と必死に懇願し、佛陀の足元に、嬰兒を置いた。女夜叉は嬰兒に近づくことができず、僧院の外にいた。佛陀はアーナンダに「女夜叉を連れて来るよう」命ぜられた。佛陀は女夜叉に「互いに復讐し合ってどうする。いつまでこのような悪行を繰り返すのか」と諫められ、「怨みを持たないことで静まる」と教えられた。この言葉で女夜叉は悟りを開いた。佛陀は母親に「この児を女夜叉に渡しなさい。」と声を掛けられ、驚きながらも母親はわが児をこわごわ女夜叉に渡した。女夜叉は児を優しく抱き、児を母親に返すと突然泣き始めたのである。佛陀がその理由を尋ねると、「人間の児を食べることができなくなりました。これから先どのように生きていったらよいのでしょうか？」と答えた。佛陀は「心配するでない」と答えられ、母親に「この女夜叉を家に連れて帰り、毎日食事を与えなさい。」と命じた。母親は女夜叉を連れて家に帰った。しばらくすると女夜叉は「多量の雨

が降るから」とか「日照りが続くから」と天候を予測し、母親の家だけが災害に遭わず多量の収穫を得ることができ、以後女夜又は幸福に生きていることができたという。<sup>(49)</sup>

この偈頌はサンフランシスコ対日講和条約の締結に際して、セイロン（現スリランカ民主主義共和国）代表ジュニウス・リチャード・ジャヤワルダナ<sup>(50)</sup> (Junius Richard Jayewardene <1906～1996>) 当時蔵相、後に首相、第二代セイロン大統領）が対日賠償権放棄の演説に引用もされている。

常磐は「佛陀訓戒の概要を挙げて、根本佛教の何たるやを示さんが爲と、他は通常佛教に基く教誨講話の講本に供せんが爲<sup>(51)</sup>」との二つの目的で、「最古の佛典より、世出世兩法に互り、尤も人事に適切なるものを纂輯せるなり。……此書に載するは、根本佛教の面影のみ。」<sup>(52)</sup>との編集方針でなされたものである。巻頭に掲げられた三つの頌偈は、佛教思想の根幹を示すものである。

常磐が「教学」として掲げた教、聞、学、知は、概ね世界観の正しい把握（認識）、社会的現象の把握、佛道の学習、実践に必要な知識の獲得を示すものである。この「教学」の章のみを考察の対象とすることは「木を見て森を見ず」に陥りがちである。全十章の一部を考察したことを明記しておきたい。

本稿では、佛教における四法印が「ダンマパダ」の中でどのように取り上げられているかを考察し、これらの佛教の根幹思想の教育・学習がどのようになされているかを考察した。佛陀の指導の中には、弟子の瞑想を重視し、瞑想を通じて「悟り」が得られるとしている。しかし、佛陀は、漠然とした瞑想を重視しているとは考えられない。因縁譚に示された瞑想の奨励は、明確な課題を与えての瞑想・思索であり、世界観・人生観に関するものではなく、個々人の課題に即した瞑想・思索であったと言えるであろう。

註

- (1) 『哲学事典』 平凡社 一三〇八頁による（但し 見出し語は 法句経）
- (2) 前掲書 一五二八頁
- (3) 前掲書 一一八七頁
- (4) 『岩波 仏教辞典』第二版 五九三頁による



- (5) 前掲書 「中世文学と仏教」の項目 七二二頁
- (6) 鴨長明は鴨御祖神社の撰社、河合社の彌宜職に任用されず、籠居遁世し、のちに出家し、法名を蓮胤と称した。
- (7) 『方丈記』(岩波新日本古典文学大系 卷三九 『方丈記 徒然草』 一二頁 校注は佐竹昭弘) 佐竹は「ユク河ノナガレハ、絶エズシテ」への註で「往く河の流れは瞬時も留ることなく。」「河の駛流(しる)して、往きて返らざる如く、人命も是の如く、逝く者は還らず」(如河駛流 往而不返 人命如是 逝者不還 法句経・無常品)に拠る。「ユク水」といわず、用例の稀な「ユク河」の語を用いているところから、法句経に依拠したと推測する。同じ箇所への註として、市古貞次は、諸説があるとしたうえで、参考資料として『十訓抄』の一部をしめしている。ここでは「方丈記とてかなにて書置物をみれば、始の詞に、行河のながれは絶えずして、しかももの水にあらずといふ。(文選) 川関水以成川。水滔々而日度。世間人而為世。人再々而行暮と云文をかけるよとおぼえて、いと哀なれ。然而彼庵にも、……との註をしている。」「新訂 方丈記」市古貞次校注 岩波文庫) 九頁および一五〇頁
- (8) 勅撰和歌集は、古今和歌集以下二十一の勅撰和歌集が編纂されている。千載和歌集以下の各和歌集には釋教の分類があるが、この分類では法華經・無量壽經・阿彌陀經などは盛んに詠われているが、法句経を題材にしたものはほとんど皆無である。
- (9) ウ・ヴィジャーナナタ大長老監修 北嶋泰観 訳注編集 『パーリ語仏典『ダンマパダ』』三二二頁  
中村元の訳では
- 「一切の形成された無常である」(諸行無常)と明らかな知慧をもって観るときに、ひとは苦しみから遠ざかり離れる。これこそ人が清らかなる道である。」(中村元訳「ブツダの真理のことは 感興のことは」 四九頁)とされ、友松圓諦の訳では「すべての行は無常なり」と、かくごとく 智慧もて知らば 彼は その苦をいとうべし これ清浄に入るの道なり」とされ、(友松圓諦訳 「法句経」 一八二頁)とされ、宮坂宥勝の訳では
- 「構成されたあらゆるものは無常である」と、智慧をもって見るときには、もろもろの苦悩を厭う。これは清浄への道である。」(宮坂宥勝著「暮らしのなかの仏教箴言集」 二九二頁)となり、片山一良は
- 「あらゆる行は無常なり、と 智慧をもって観るときに かれは苦を厭い離れる これ清浄にいたる道なり」と訳し、(片山一良著「ダンマパダ」をよむ 下 一三七頁) 佐藤光夫は
- 「一切の形式は無常である」と般若によって見る時
- その時に苦しみを厭い離れる、これが清浄になるための道である。」と訳している。(佐藤光夫訳註『新現代語訳 DHAMMAPADA (ダンマパダ) 原始仏教の智慧』一四三頁) また Max Müller<sup>14)</sup>
- 'All created things perish, he who knows and sees this becomes passive in pain: this is the way to purity.」(訳) ("Wisdom of the Buddha" The Unabridged Dhammapada" Translated and edited by F. Max Müller p.34) Harischandra Kaviratna<sup>15)</sup>
- "Transient are all composite things"; he who perceives the truth of this gets disgusted with this world of suffering. This is the path to purity. (http://www.theosociety.org/pasadena/dhamma/dham-tp.htm) よりタウンロードされ、世界仏教協会の訳は

『ダンマパダ』と教育(一)



- “All conditioned things are impermanent” - when one sees this with wisdom, one turns away from suffering. This is the path to purification. よかれ  
(<http://www.Buddhanet.net/e-learning/Buddhism/dhammapada.htm> 以下Buddhanetと略称。訳者はAcharya Buddhārakkhita p.65 よりタウ  
ンロードした。なおパーリ語の原文は  
Sabbhe sañhārā anicca ti, yadā paññāya passati,  
Atha nibbindatā dukkhe esa maggo visuddhiya.である。
- (10) ウ・ヴィジャーナナダ大長老監修 北嶋泰観 訳注編集 「パーリ語仏典『ダンマパダ』」三三三頁
- (11) Eugene Watson Burlingame “Buddhist Legends” vol. third p.150  
op.cit.p.150
- (12) 「大正新脩大藏經」第三卷 六八二頁 中段「出曜經」 沙門品(東京帝國大學文科大學印度哲學研究室編 「巴利語漢文對照法句經」を参照  
した。)
- (13) この一節に関して、岩波文庫の「平家物語」は注で、次のように記している。一 「祇園」は「祇樹給孤獨園」の略。中部インド、コーサラ国  
の皇子ジューダの林苑を富豪スタッタが買収し、僧院を建てて釈尊に寄進したもの。「精舎」は「精進の堂舎」の意。その西北隅に無常堂があ  
り、収容された病僧が臨終を迎えると、その四隅の玻璃と白銀の八つの鐘が自然に鳴って諸行無常の偈をしめしその苦を和らげたという。二  
涅槃經・聖行品に見える偈の一句。万物は生滅流転し、常住不変ではない、の意。三 「沙羅」は梵語サーラの音訳で、日陰をつくる大樹の  
意。クシナガラ郊外にあり、釈迦が入滅した時に白い花を咲かせたという。四 威勢のある者も滅びてしまうものであるという道理を示し  
ている。仁王經・護国品に見える句。梶原正昭・山下宏明校注 「平家物語」 一一五頁
- (14) ウ・ヴィジャーナナダ大長老監修 北嶋泰観 訳注編集 前掲書 三三三頁
- (15) 中村元の訳では  
「一切の形成されたものは苦しみである(一切皆苦)と明らかな智慧をもって観るときに、ひとは苦しみから遠ざかり離れる。これこそ人が  
清らかになる道である。(中村元 前掲書 四九頁)とされ、友松圓諦の訳では  
「すべての行は くるしみなり」と かくのごとく 智慧もて知らば  
彼は そのくるしみを厭うべし これ清浄に入るの道なり」とされ(友松圓諦訳 前掲書 一八二頁)、宮坂宥勝の訳では  
「構成されたあらゆるものは苦惱である」と智慧をもって見るときには、もろもろの苦惱を厭う。これは清浄への道である。」とされ(宮坂宥  
勝著 前掲書 二九一頁)、片山一良の訳では  
「あらゆる行は苦なり、と 智慧をもって観るときに  
かれは苦を厭い離れる これ清浄にいたる道なり」とされ(片山一良著 前掲書 一三八〜一三九頁) 佐藤光夫は  
「一切の形成は苦しみである。」と般若によって見る時  
その苦しみを厭い離れる、これが清浄になるための道である。」(佐藤光夫訳 前掲書一四三頁)と訳し、また、Max Müllerは、

- “All created things are grief and pain, he who knows and sees this becomes passive in pain, this is the way that leads to purity.” (Max Müller op cit p.34) ˆ Harischandra Kaviratna<sup>15</sup>
- “Sorrowful are all composite things” he who perceives the truth of this gets disgusted with this world of suffering. This is the path to purity.” ˆ 英訳し、世界仏教協会の訳は
- “All conditioned things are unsatisfactory” - when one sees this with wisdom, one turns away from suffering. This is the path to purification.” (Buddhanet op. cit P.65) ˆ なお、パーリ語原文は
- “Sabbe dhammā anatā” ti yadā paññāya passati,  
 Atha nibbindati dukkhe esa maggo visuddhiyā.” ˆ
- Eugene Watson Burlingame vol.3 op.cit.p.150
- (16) 「大正新脩大藏經」第三卷 六八二頁 中段～下段 「出曜經」 沙門品 (東京帝國大學文科大学印度哲學研究室編 「巴利語漢文對照法句經」を参照した。)
- (17) 中村元著 「佛敎語大辭典」 二六五頁
- (18) 中村元著 前掲書 五一頁
- (19) ウ・ヴィジャーナタ大長老監修 北嶋泰観 訳注編集 前掲書 三二三頁
- (20) 中村元の訳では
- 「一切の事物は我ならざるものである」(諸法非我)と明らかな智慧をもって観るときに、ひとは苦しみから遠ざかり離れる。これこそ人が清らかなる道である。」(中村元訳 前掲書 四九頁)とされ、友松圓諦の訳では
- 「すべての法は わがものにはあらず」と かくのごとく 智慧もて知らば
- 彼は そのくるしみを厭うべし これ清浄に入るの道なり (友松圓諦訳 前掲書 一八三頁)とされ、宮坂宥勝の訳では
- 「あらゆるものは実体がない」と智慧をもって見るときには、もろもろの苦悩を厭う。これは清浄への道である。」(宮坂宥勝著 前掲書 二九一頁)とされ、片山一良の訳では
- 「あらゆる法は無我なり、と 智慧をもって観るときに
- かれは苦を厭い離れる これ清浄にいたる道なり」(片山一良著 前掲書 一四二頁)とされ、佐藤光夫は、
- 「一切のものは我(実体)をもたない。」と般若によって見る時
- その時に苦しみを厭い離れる、これが清浄になるための道である。」(佐藤光夫訳註 前掲書一四四頁)と訳し、また Max Müller<sup>15</sup>
- ˆ “All forms are unreal.” he who knows and sees this bwcomes passive on pain; this is the way that leads to purity.” ˆ 英訳 ˆ (Max Müller op.cit p.34) ˆ
- Harischandra Kaviratna<sup>15</sup>

‘All forms of existence are unreal’ (anatta) ; he who perceives the truth of this gets disgusted with this world of suffering. This is the path to purification.’ (英訳) 世界仏教協会は、

‘All things are not-self’ - when one sees this with wisdom, one turns away from suffering. This is the path to purification.’ (Buddhanet op. cit P.65) と英訳している。なおパーリ語原文は

‘Sabbe dhamma anatta ti, yada paññāya passati,

Atha nibbindatā dukkhe esa maggo visuddhiyā.

である。

(21) Eugene Watson Burlingame vol.3 op.cit.p.151

(22) 「大正新脩大藏經」第三卷 六八二頁 下段

(23) 「大正新脩大藏經」第三卷 六八二頁 下段〜六八三頁 上段

(24) 中村元著 前掲書 六九一頁

(25) 中村元著 前掲書 四八七頁

(26) 中村元著 前掲書 一〇七七頁

(27) 中村元著 前掲書 一〇四〇頁

(28) ウ・ヴィジャーナンド大長老監修 北嶋泰観 訳注編集 前掲書 一四六頁

中村元の訳では

「物事が興りまた消え失せることわりを見ないで百年生きるよりも、事物が興りまた消え失せることわりを見て一日生きるこのほうがすぐれている。」(中村元訳 前掲書 二六頁)とされ、友松圓諦の訳では

「人もし生くること 百年ならんとも 一切の いかん生起り いかんほろぶるやを するならば この生滅の理を知りて 一日生くるにも およばざるなり」(友松圓諦訳 前掲書 八〇頁)とされ、友松の訳を基盤に置く瀬戸内寂聴は

「人がたとえ 百年生きようと 物ごとの興り どうして消えほろびるかの

ことわりを知らないなら この生滅のことわりを知り 一日生きるのにも及ばない」(瀬戸内寂聴著 「法句経を読む 寂聴 生きる知恵」

二〇頁)とされ、宮坂宥勝の訳では

「また、たとえ百年生きてても、[事物の]生起と消滅とを見なければ、一日生きて

[事物の]生起と消滅とを見るほうがよい。」とされ、片山一良は

「生と滅とを見ることもなく 百年生きながらえるより

生と滅とを見とおして 一日生きる方がまさる」と訳し(片山一良著 前掲書 一五三頁)、山田無文は

「生と死の ことわりしらず ももとせを ながらえんよは

生と死の ことわりしりて いきたらん いちにちぞよき」と訳し（山田無文著 「法句経 真理の言葉」一〇四〜一〇五頁）、福島慶道は

「人もし生くること 百年ならんとも 一切の いかん生起り いかんほろぶやを知るなくば この生滅の理を知りて 一日生くるにも およばざるなり」と訳し（福島慶道著 「法句経のこころ」 八四頁）とし、佐藤光夫は

「また生滅を見知らない百年を生きる（こと）よりも 生滅を見知る一日を生きる方がすぐれている。」（佐藤光夫訳註 前掲書五七頁）と訳している。またMax Müllerは

“And he who lives a hundred years, not seeing beginning and end, a life of one day is better if a man sees beginning and end.”と英訳し（Max Müller, op. cit. p.14）. Harischandra Kaviratnaは

“A single day’s life of one who clearly sees the origin and cessation (of all composite things), is better than a hundred years of life of him who does not perceive the origin and cessation of things.”と英訳し、世界仏教協会は

“Better it is to live one day seeing the rise and fall of things than to live as hundred years without ever seeing the rise and fall of things.” (Buddhanet op. cit. P.65) と英訳している。因みにパーリ語原文は

Yo ca vassasatani jive apassani udayavvayam,  
Ekahani jvitani seyyo passato udayavvayam.

である。

(29) Eugene Watson Burlingame op. cit vol.2 pp.250-256 この因縁譚には三つの偈頌が引用されている。第一の偈頌を中村元は

「子も救うことができない。父も親戚もまた救うことができない。死に捉えられた者を、親族も救い得る能力がない。」と訳し（中村元 前掲訳書 五〇頁）、友松圓諦は、

「子も 父も 親族（やから）も 救護者（すくい）て）にはあらず 死に 捉えられたる者を 親族（したしき）も すくう能はず」と訳し、（友松圓諦 前掲訳書 一八七頁）、宮坂有勝は、

「死神に執われたら、子供たちも父親も、親族も親戚も、これを救うことができない。」と訳し（宮坂有勝 前掲書 二〇二頁）、片山一良は、

「死魔に支配された者に 子らもまた父親も 親族の中に救護なし」と訳し（片山一良『タンマパダ 全詩解説 仏祖に学ぶひとすじの道』三六四頁）、山田無文は、

「吾子（あこ）とても はた父とても 誰かは止（とど）めん  
うかららも

死の門出」と訳し（山田無文 前掲書 二二〇頁）、佐伯快勝は、

「子も救うことができない

父も親戚もまた救うことができない  
死に捉えられた者を

親族にも救い得る能力がない」と訳し、佐藤光夫は、

「子供たちを庇護することはできない 父親にはできない 親族たちにもできない  
悪魔の手の上に落ちた者に対する親族たちによる庇護は存在しない。」と訳し、(佐藤光夫 前掲訳註書 一五一頁)とし、またMax Müllerは

'Sons are no help, nor a father, nor relations; there is no help  
from kinsfolk for one whom death has seized.' (Max Müller op cit p.35) 'Hartischandra Kavranatā'

'Sons are no protection, neither father nor kinsfolk; when one is assailed by death, there is no protection among one's kin.' (英訳)

(Hartischandra Kavranatā op cit) '世界仏教協会の英訳は、  
'For him who is assailed by death there is no protection by kins men. None there are to save him--no  
sons, nor father, nor relatives.' (Buddhanet op cit p.55) となっている。

パリー語の原文は  
Na santu puttā tanāya                      na pitā nappi bandhava  
Antakena'      dhoppannassa                      nathī natīsu tanatā

であり、漢訳は  
非有子恃      亦非父兄                      爲死所追      無親可怙 (無常品)  
第二の偈頌を中村元は

「心ある人はこの道理を知って、戒律をまもり、すみやかにニルヴァーナに至る道を清くせよ。」と訳し(中村元 前掲訳書 五〇頁)、友松は、

「この義理を知りて 心あるひとは ただ おのずから 戒(をまもり 涅槃(さとりにいたるべき道を げにすみやかに 歩むべし)」と  
訳し(友松圓諦訳 前掲書 一八八頁)、宮坂宥勝は、

「賢い者はこの道理のあるところを知って、徳行を守り、心の安らぎに至る道を速やかにまさに清めるがよい。」と訳し、片山一良は、

「この道理をよく知って 賢者は戒をもって防護し 涅槃に到達する道を ただ速やかに浄めるがよい」と訳し(片山一良『ダンマパダ 全  
詩解 説 仏祖に学ぶひとすじの道』三六四頁)、山田無文は、

「このことわりを 知りたらん 賢き人は み仏の  
教えを護り ひたすらに 涅槃の道を 励むべし」と訳し(山田無文 前掲書 一三〇〜一三二頁)と訳し、佐伯快勝は、

「心ある人はこの道理を知って  
戒律をまもり

すみやかにニルヴァーナに至る道を清くせよ」と訳しており、佐藤光夫は

「戒めを守り（自己を）律する賢者はこの道理を知って

涅槃へと到る道をまことに速やかに浄めるであろう。」と訳しており、また Max Müller は

‘A wise and good man who knows the meaning of this, should quickly clear the way that leads to Nirvana.’ (Max Müller op. cit. p.35) と英訳し、  
Harschandra Kaviratna は、

‘Having perceived this significant fact, let the wise and self-restrained man quickly clear the path that leads to nirvana.’

(Harschandra Kaviratna op.cit) と英訳し、世界仏教協会の英訳は、

‘Realising this fact, let the wise man, restrained by morality, hasten to clean the path leading to Nibbana.’ (Buddhanet  
op.cit. p.67) と訳している。なお、パーリ語原文は

Ezannathavasani natva                      pandito silasamvuto

Nibbāngamanani maggani                      khippaneva visodhaye                      であり、漢訳では

慧解是意                      可修經戒                      勤行度世                      一切除苦（道行品）とされており、また第三の偈頌を、中村元は

「物事が興りまた消え失せることわりを見ないで百年生きるよりも、事物が興りまた消え失せることわりを見て一日生きることのほうがすぐれている。」と邦訳し（中村元 前掲訳書 一六六頁）、友松圓諦は、

「人もし生くること                      百年（ももとせ）ならんとも

一切（すべてのもの）の                      いかに生起（おこ）り

いかにほろぶるやを                      知るなくば

この生滅の理（ことわり）を知りて                      一日生くるにも

およばざるなり」と邦訳し（友松圓諦 前掲訳書 八〇頁）、宮坂宥勝は、

「また、たとえ百年生きてても、〔事物の〕生起と生滅とを見なければ、一日生きて〔事物の〕生起と生滅とを見るほうがよい。」と邦訳し（宮坂  
宥勝 前掲書 二六七頁）、片山一良は、

「生（しよう）と滅（めつ）とを見ることなく                      百年生きながらえるより

生と滅とを見とおして                      一日生きる方がまさる」と邦訳し（片山一良 『ダンマパダ』をよむ」 下 一五三頁）、

山田無文は、

「生と死の                      ことわりしらず

ももとせを                      ながらえんよは

生と死の                      ことわりしりて

いきたらん                      いちにちぞよき」と邦訳し（山田無文 前掲書 一〇四〜一〇五頁）、福島慶道は、

「人もし生くること                      百年（ももとせ）ならんとも

一切(すべてのもの)の いか(おこ)り  
いかにほろぶやを 知るなくば

この生滅の理(ことわり) 知りて 一日(おこ)るにも

およばざるなり」と邦訳し(山田無文著 前掲書 八四頁)、佐伯快勝は、

「物事が興りまた消え失せることわりを見ないで  
百年生きるよりも

物事が興りまた消え失せることわりを見て

一日いきることのほう(おこ)がすぐれている」と邦訳し(佐伯快勝著 前掲書 九二頁)、友松圓諦の訳文を参照した瀬戸内寂聴は、

「人がたとえ

百年生きようと

物(おこ)との興り

どうして消えほろぶるかの

ことわりを知らないなら

この生滅のことわりを知り

一日(おこ)生きるのにも及ばない(瀬戸内寂聴著 「寂聴 生きる知恵」 二〇頁)、佐藤光夫は、

「また生滅を見知らない百年を生きる(おこ)りも

生滅を見知る一日(おこ)を生きる方がすぐれている。」と邦訳している。(佐藤光夫訳註 前掲書 五七頁)。また、Max Müllerは

‘And he who lives a hundred years, not seeing beginning and end, a life of one day is better if a man sees beginning and end. (Max Müller op cit. p.14) ‘ Harischandra Kaviratnaは、

‘A single day’s life of one who clearly sees the origin and cessation (of all composite things) , is better than a hundred years of life of him

who does not perceive the origin and cessation of things,’ と英訳し (Harischandra Kaviratna op cit) ‘ 世界仏教協会は

‘Better it is to live one day seeing the Supreme Truth than to live a hundred years without ever seeing the Supreme Truth.’ (Buddhanet op cit. p.40)

と英訳している。なお、パーリ語の原文は

Yo ca vassasatani jive apassani udayabbayam

Ekāhani jivīvāni seyyo passato udayabbayam であり、漢訳は若人壽百歲 不知大道義 不如生一日 學推佛法要(述千品)

である。

(30) 中村元著 前掲書 三五五頁

(31) 「大正新脩大藏經」 第三卷 五六四頁 下段 「法句経」 述千品



- (32) 中村元著 前掲書 三八六頁
- (33) 常盤大定著 「佛陀之聖訓」 一二五～一二六頁 但し 引用されている 経は「大正新脩大藏經」 第三卷 一〇五頁 上段～中段 「雜阿含經」 (三八九)
- (34) 中村元著 前掲書 五二三頁～五二四頁
- (35) 「大正新脩大藏經」 第三卷 五六〇頁 上段
- (36) 同上
- (37) 同上
- (38) 「大正新脩大藏經」 第三卷 七二四頁 下段 「出曜經」 廣演品
- (39) 「大正新脩大藏經」 第三卷 七二五頁中段 「出曜經」 廣演品
- (40) 「大正新脩大藏經」 第三卷 七〇九頁 中段 「出曜經」 華品
- (41) 「大正新脩大藏經」 第三卷 七二九頁 中段 「出曜經」 親品
- (42) ウ・ヴィジャーナナダ大長老監修 北嶋泰観 訳注編集 前掲書 一一二頁
- 中村元の訳では
- 「水道をつくる人は水をみちびき、矢をつくる人は矢を矯め、大工は木材を矯め、賢者は自己をととのえる。」と訳し(中村元 訳 前掲書 二二頁)、友松圓諦の訳では
- 「疎水師は げに 水をみちびき 矢箭匠は 箭をためなおし 木工は 木を曲げととのう 智者は おのれを ととのうるなり」と訳し(友松圓諦 前掲書 六二頁)、宮坂宥勝の訳では
- 「運河づくりの技師たちは水を導き、弓作りをする者たちは矢をまっすぐにし、木工たちは木を整える。賢者は己を整える。」と訳し(宮坂宥勝著 前掲書 二六二頁)、片山一良は
- 「灌漑人は水を導き 矢作りは矢を矯める
- 木工人は木材を矯め 賢者は自己を調御する」と訳し(片山一良 前掲書 一五〇頁)、佐藤光夫は
- 「治水工たちはまさに水を導く 矢づくり職人たちは矢を矯める
- 大工たちは木材を曲げる 賢者たちは自己を調える。」(佐藤光夫 訳 前掲書四〇頁)と訳し、Max Müllerは
- “Well-makers lead the water (wherever they like) ; fletchers bend the arrow; carpenters bend a log of wood; wise people fashion themselves.” と英訳し、Harschandra Kaviratnaは
- “Irrigators conduct the water wherever they wish; fletchers shape the shafts; carpenters work (1) the wood, and wise men discipline themselves.” と英訳し、世界仏教協会は
- “Irrigators regulate the rivers; fletchers straighten the arrow shaft; carpenters shape the wood; the wise control themselves.” (Buddhanet op. cit

P.35) という英訳をしている。パーリ語の原文は

Uḍakam hi nayanī nettikā,

usukāra nanyanti tejanam,

Dāruṇi nanyanti tacchakā,

attānāṇi danayanti paṇḍitā. である。

(43) ウ・ヴィジャーナタ大長老監修 北嶋泰観 訳注編集 前掲書 一一二頁

中村元は

「一つの岩の塊りが風に揺るがないように、賢者は非難と賞讃とに動じない。」と訳し(中村元 訳 前掲書 一二二頁)、友松圓諦の訳では

「一かかえほどの盤石 風にゆらぐこともなし かくのごとく 心あるものは

そしりと ほまれとの中に 心うごくことなし」とされ、(友松圓諦訳 前掲書 六二頁)、宮坂有勝の訳では

「ひとかたまりの岩が風に揺らぐことがないように、そのように賢者たちは誹謗と賞讃のなかであって動くことがない。」とされ(宮坂有勝著

前掲書)、片山一良は

「あたかも堅い岩山が 風によって揺るがぬように

賢者は非難と称賛に けつして動じることがない」と訳し(片山一良 前掲書 上 七一頁)と訳し、山田無文は

「風おかにふくとも 巖ゆるがざる

ごとくも智者は ほまれにも

またそしりにも ことろごかじ」と訳し(山田無文著 前掲書 七八頁)、佐藤光夫は

「ひとつの堅い岩が風によつては動かないやうに

そのように賢者たちは非難や賞賛によつては動かない。」(佐藤光夫 前掲書四一頁)と訳し、Max Müllerは

“As a solid rock is not shaken by the wind, wise people faller not amidst blame and praise.”と英訳し、Harischandra Kaviratanaは

“As a solid rock is not shaken by the wind, so the wise are not shaken by censure or praise.”

と英訳し、世界仏教協会は

“Just as a solid rock is not shaken by the storm, even so the wise are not affected by praise or blame.” (Buddhanet op. cit P.35) と英訳している。

パーリ語の原文は

Selo yathā ekagghano vātena na sannirati,

Evamī nindāpasāṭṭhasu na sammājanī paṇḍitā. である。

(44) Eugene Watson Burlingame op. cit vol 2 pp184-189

(45) Eugene Watson Burlingame op. cit vol. 2 pp189-190

(46) 常磐大定の示した英文の三つの偈頌は以下の通りである。

To abandon all wrongdoing; to lead a virtuous life, and to cleanse one's heart, This is the religion of all buddhas, (The Gospel of Buddha)

Hatred does not cease by hatred at any time; hatred ceases by love, this is an old rule. (Dhammapada)  
They're transient all, each being's parts and powers, Growth in their nature, and decay.  
They are produced, they dissolved again; And then is best, when they have sunk to rest!  
(Maha-Parinibbana-Sutta) への偈頌は「雪上傷」となれ、「いろは歌」のもととなったとされている。常磐大定前掲書 但し 頁はつけられていない。

(47) ウ・ヴィジャーナンド大長老監修 北嶋泰観 訳注編集 前掲書 八頁

中村元は

「実にこの世においては、怨みに報いるに怨みを以てしたならば、ついに怨みの息むことがない。怨みをすててこそ息む。これは永遠の真理である。」と訳し(中村元訳 前掲書 一〇頁)、友松圓諦の訳では

「まこと、怨み(ころ)は いかなるすべをもつとも 怨みを懐くその日まで ひとの世にやみがたし うらみなさによりてのみ うらみはついに消ゆるべし こは易らざる真理なり」とし(友松圓諦訳 前掲書 一四頁)、この友松の訳を受けて瀬戸内寂聴は

「ほんにそうよ 怨み(ころ)というものは どんな手だてをつくそうと 怨みをすてぬその日まで この人の世から消えはせぬ 怨みをすてたその日から 怨みは影を消すものよ これこそ真実永遠の 変わらぬ真理というものよ」(瀬戸内寂聴著

前掲書 七九頁)との訳を与え、宮坂宥勝は

「この世の中では怨みは怨みによってけつして静まるものでない。ところが(怨みは) 怨みなくして静まる。これは永遠の真理である。」と訳し(宮坂宥勝著 前掲書 二五一頁)、片山一良は、

「この世の怨みは怨みをもって 静まることはありえない

怨みを捨ててこそ静まる これは永遠の法である」と訳し(片山一良著 前掲書 下 一六〇頁)、山田無文は

「怨みは怨みをもて

怨みをわすれてのみ 解くべからず

いにしえも今も 解くべし 変わらぬ真理なり」と訳し(山田無文著 前掲書 三二頁)、佐藤光夫は

「実に怨みによって人々の怨みがこの世で鎮まることは決してない

しかし怨みを持たないことによって彼らの怨みは鎮まる、これが永遠の法である。」(佐藤光夫訳註 前掲書四頁)と訳し、Max Müllerは

“For hatred does not cease by hatred at any time; hatred ceases by love, this is an old rule.”と英訳し(F, Max Müller op. cit p.1) ʼ Harischandra Kavratna<sup>15</sup>

“Through hatred, hatreds are never appeased; through non-hatred are hatreds always appeased – and this is a law eternal.”と英訳し、世界仏教協会

は “Hatred by hatred has been pacifiedNever, in all of creation. Through freedom from hatred does hatred subside : This law is of ageless duration.”と

『ダンマパダ』と教育(一)

- 英訳している (Buddhanet op. cit. P.23)。なおパーリ語の原文は  
na hi verena verāni sammantī dha kudācanamī,  
averenacasaṃmantī, esa dhammo sanantano.」
- (48) 「トネスロ憲章 前文」 [http://portal.unesco.org/en/ev.php-URL\\_ID=6206&URL\\_DO=DO\\_TOPIC&URL\\_SECTION=201.html](http://portal.unesco.org/en/ev.php-URL_ID=6206&URL_DO=DO_TOPIC&URL_SECTION=201.html)。
- (49) Eugene Watson Burlingame op.cit vol.1 pp170～174 の因縁譚は「鬼子母神」と結びつけて考えられる。
- (50) [http://en.wikipedia.org/wiki/Junius\\_Richard\\_Jeye\\_Wadene](http://en.wikipedia.org/wiki/Junius_Richard_Jeye_Wadene)。
- (51) 常磐大定著 「佛陀之聖訓」 自序
- (52) 常磐大定著 前掲書 凡例